

## Y13b 小中学校理科におけるプラネタリウムの学習投影に関する現状と課題 III

二瓶美生 (刈羽村立刈羽中学校), 濤崎智佳 (上越教育大学), 金子紘之 (新潟大学)

2017年告示の小中学校学習指導要領理科では、博学連携が推進されており、プラネタリウムの利用に関しては、4年生「月と星」、6年生「月と太陽」で記述が見られる。我々は、プラネタリウムの学習投影の現状を理解するために、新潟県上越市・柏崎市の小中学校を対象にプラネタリウム学習投影に関する教員アンケートを行い、移動手段などの問題から利用したくてもできない現状があることを明らかにした(2022年秋季年会 Y11b)。この結果を受けてプラネタリウム学習投影 360 度動画を作成、これを用いた授業実践を行い、さらに柏崎市立博物館プラネタリウム学習投影を利用した児童生徒と引率教員に対してアンケート調査を行った。授業実践と児童生徒に関する調査結果は 2023 年春季年会に報告している (Y06b)。今回は、このうち引率教員に関するアンケート調査結果を報告する。引率教員のアンケート回答数は 51 名である。

引率教員自身の利用経験を調査したところ、13 名 (25.5 %) が学校の授業や行事でプラネタリウムを利用した経験があった。学習投影に対する評価では、「学習投影を通して、児童生徒の天文分野の理解がしやすくなると思う」に対して「そう思う」が 44 名 (86.3 %)、「今後も学習投影を利用したいと思う」に対して「そう思う」が 45 名 (88.2 %) となり、引率した教員は、学習投影の有用性を実感し、また利用したいと考えていることが明らかになった。また、21 名から自由記述への回答があった。「自分の学校から見た風景 (スカイラインを用いた投影) で投影されていることが良かった」という趣旨の回答が 6 名あり、身近な風景を用いた投影は学習投影における一つのポイントである可能性が示唆される。